2019.8.5
No.214

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間1,500円）

平和と民主主義を守りたい『銀河通信』は32年目にGO！

7月21日　美瑛富士避難小屋近くの天然庭園のチングルマとエゾツガザクラの群落

暑い夏ですが読者の皆さまはお元気ですか。

６月から７月にかけて大きな出来事が続きました。

元従軍慰安婦の証言を伝えた１９９１年の記事で「捏造記者」と攻撃の標的にされた元朝日新聞記者の植村隆さんの名誉棄損訴訟で、東京地裁（原克也裁判長）は６月２６日、名誉が棄損されたことを認めながら、西岡力被告らを免責する「不当判決」を下しました。植村さんは７月９日、東京高裁に控訴しました。

札幌訴訟控訴審は７月２日、札幌高裁で2回目の口頭弁論が行われました。植村さんが意見陳述。「証拠をきちんと検討し、公正な判決を出していただきたい」と訴えました。弁護団からは一審の問題点を指摘した計3通の意見書・陳述書を基に一審判決の取り消しを求める内容を説明しました。次回口頭弁論は１０月１０日に決まりその日に結審することになりました。たくさんの傍聴をお願いします。

参議院選挙が7月21日にありました。改憲勢力は、改憲の発議に必要な3分の2に達しませんでした。野党協力が功を奏したと言えるでしょう。投票率は４８．８％の低投票率でした。それでも安倍首相は改憲に意欲を燃やし、他の政党と協力の構えを崩していません。山本太郎代表が結成した、れいわ新選組は重い障害のある二人を当選させました。「障害者と健常者が共に学びあえる教育を実現させたい」と訴えた木村英子さん。心に響きました。国会の設備も変えたり、介助の問題なども考えなければなりませんね。政治に風穴を開けた意義は大きかったと思います。

投票前、札幌で安倍首相の街頭演説中に「安倍やめろ」とヤジを飛ばした男性などが警官５～６人に体をつかまれ排除されました。まるで戦前の治安維持法が復活したのかと怒りを覚えました。同様の事件が大津市でもあり、現政権の意図を感じました。言論の自由が脅かされる事態は許せません。政権を利用して何らかの権限の行使が強化されてはならないと思います。メディアもしっかりと権力を監視してください。私たちも、政治を他人事とせずに語り合っていきたいと思います。

選挙戦さなかの７月１８日に起きたのが京都アニメーションの放火事件でした。３５人が亡くなりました。あまりにも理不尽です。京アニは質が高く丁寧な作品づくりで知られていました。数多くの若い才能が奪われたのは残念で悲しいです。アニメーターとして活躍する「なつぞら」のなつと重ねて、アニメの世界の奥深さを感じていました。世界中のアニメファンが「京アニに感動をもらった」と伝えています。再建に期待しています。

７月２３日は私の誕生日でした。だいぶ体力が落ちましたが、元気に登山を続けています。１９８８年7月１０日に創刊した「銀河通信」が３１歳になりました。これからも平和と民主主義を守るために書き続けたいと思います。これからも応援よろしくお願いします。

7月29日　黒岳石室付近の高山植物帯でパトロール中の筆者

新聞を守るのは読者だ

軍事独裁政権と闘った韓国の言論人２人が７月３日、北海道大学で講演しました。韓国で植村隆さんを支援する団体を立ち上げ、札幌高裁で開かれた植村裁判も傍聴しました。

「忍耐は美徳」ではない

市民が出資して１９８８年に創刊されたハンギョレ新聞の、当時の副社長、任在慶（イム・ジェギョン）さんは「ムチで打たれても痛いと言えず、腹が空いてもそう言えない時代が続いてきた。圧力が強ければ反発も強まる。創刊は、言論弾圧に対する人々の強い反発の結果だった」

写真・任在慶さん

「『忍耐は美徳だ』というのはウソだ」と強調する。

かつて李承晩大統領を退陣させた民主化運動のなかで誕生した新聞が、４０日で廃刊し創設者は北のスパイとして処刑されている。ハンギョレ新聞を守ったのは読者、市民、広告主たちだった。 創刊時２万７千人の株主は今６万９千人、発行部数は50万部という。「株主は一度も配当を受けていない。ハンギョレ新聞のあり方に納得してくれているからと思う」

「言論の自由が保障されている日本で、人々は言うべきことを言っているのだろうか。慰安婦報道で裁判を戦っている植村隆さんのように不当な攻撃には声をあげなければならない」

時代の大きな流れ、運動の方向が味方したと話す。民主化闘争で軍事政権が終結に向かい、経済的平等への志向が強まった「時の運」が、ハンギョレ新聞を生んだと振り返る。

「時の運は、偶然には生まれてこない。日本の言論の自由は、憲法９条を変えようとしている勢力との戦いに左右される。国の主権は、君主や大統領にあるのではない。人々が『国民主権』をどれだけ意識しているかにかかっているだろう」とも語った。

弱まる言論の発言力

写真・李富栄さん（この記事の撮影は益子美登里さん）

元東亜日報記者の李富栄（イ・ブヨン）さんは１９７５年、朴正熙政権の言論検閲に抗して解雇され投獄された。「特派員をはじめ日本の人々は、私たちの闘いをずっと支援してくれた。だからあの慰安婦報道で植村隆さんが攻撃されているのは、信じ難いことだ」

１９６５年の日韓条約反対の学生運動にかかわった。「条約は朝鮮併合、植民地支配の反省もないところで結ばれた。経済協力金は、韓国独立祝賀金だった。河野談話や数々の首相談話、平成天皇の『痛惜の念』表明は、植民地化への謝罪だが安倍政権はすべて覆した」

東亜日報の約２００人が、自由な言論の実施を宣言して朴正熙の検閲に対抗。全国３５社の言論人が同調した。新聞広告を出させない圧力で白紙になったスペースに、市民の激励広告が寄せられた。しかし圧力に屈した会社側は、１６６人を解雇した。

「軍事独裁政権を終わらせないと記者には戻れない。民主化運動の全国組織を作る一方で金大中、金泳三ら野党指導者などとの橋渡し役も務めた」。大統領の直接選挙制を目指す改憲運動で４回目の投獄。度重なる刑務所暮らしで親しくなった保安係長から、ソウル大生が水攻めの拷問で死亡したこと、犯人とされる捜査官２人がここにいるが、真犯人は外にいることと知った。

「保安係長に私との面談記録は廃棄しろと伝えた。私が何をしようとしているのか彼は察したと思うが、黙って見過ごしてくれた」事件の真相は、外部の協力者を通じて暴露され、８７年の大統領直選制に結び付いた。事件は「１９８７、ある闘いの真実」として映画化された。「私は記者の使命を果たせて満足している」

「政治は残酷なものだ。議席を得るようになった政治家は『在野の者は口を出すな』という態度に変わっていく。復職の望みを断たれた記者たちは『自分たちで新聞を作ろう』と思い立った。それがハンギョレ新聞として実を結んだ」

新聞などのメディアは以後急増したが、大資本の影響力も強まり、保守化が進んでいるという。「大新聞が変節、ＳＮＳの発達で、正当な言論の発言力が弱まっている」のが今の課題と話した。

（ＪＣＪ北海道支部・林　秀起）

イム・ジェギョンさん、イ・ブヨンさんは韓国の民主化に力を尽くしてこられました。

ハンギョレ新聞は韓国の歴史を体現していると話したイムさん。不当な弾圧を受けた時は声を上げなければならない。日本人は言うべきことを言ってないのではないかと批判。主権はピープルにあると明快に語りました。ハンギョレ新聞は主人のない山だとも。

イ・ブヨンさんは記者時代に民主化闘争に加わり、投獄されました。軍事独裁政治を止めなければ記者には戻れないと思い、闘ったと語りました。何度も刑務所に入ったために刑務官と仲良くなった。その一人は 「このままでは国が滅びる」と憤りました。「１９８７、 ある闘いの真実」では水拷問でなくなった大学生が出てきましたね。実際の犯人は捕まっていなかったのです。林さんの文章と重複するので略します。。

２年前のろうそく革命についても語りました。韓国の人々は独裁政治の歴史を学んできました。「事実を知れば結集する」とも。

これが「真実は閉じ込められない」ということかと感動しました。
　戦争の歴史をきちんと学んでいない私たち。
　韓国では「1987、ある闘いの真実」「タクシー運転手」など実際の事件を描いた映画も多いです。イ・ミヨンパク、パク・クネ両政権の言論弾圧を告発した「共犯者たち」もあります。
　お二人のお話を聞いて、権力に立ち向かい、真実を伝え続ける精神は今に生きているのを知り、感銘を受けました。110人で会場は一杯になりました。（みな子）

花パトロール　山は今日も快晴なり

エゾツツジ

アカモノ

エゾコザクラ

エゾヒメクワガタ

　７月２１日に美瑛富士避難小屋のトイレブースの点検登山に急に参加することが決まり２０日に事前投票を済ませ登ってきました。この小屋は、オプタテシケ山などの縦走時に利用する登山者が使用しています。以前は小屋の外にトイレがなく小屋周辺は汚物だらけ。ティッシュがあちこちに散乱していました
　山のトイレを考える会が中心になってようやく簡易型のトイレブースができて5年になります。私もトイレができる前から何度か清掃登山で協力してきました。日本山岳会北海道支部もトイレブースの管理団体の一つです。
　Ｋ事務局長が、南区まで、避難小屋に補充する携帯トイレを受け取りに行ったため江別7時半、富良野に向けて出発。登山口１０時５０分から歩きはじめました。目的地まで私の足で往復６時間半かかります。天然庭園周辺は、ゴロゴロした大きな石の道が続き転ばないように注意を払わなければならず、その上、急登が続き難儀を強いられます。暑さで全身汗まみれになりながら、Ｋさんと進みました。最初の２時間は見通しがあまりよくありませんが高度が上がるにつれ、さまざまな花たちが出迎えてくれました。リーダーが、目的地に早く着かないと帰りが暗くなるというので写真はあまり撮れませんでした。見た花だけでもと記録しました。ゴゼンタチバナ、マルバシモツケ、エゾノツガザクラ、アオノツガザクラ、チングルマ、ウコンウツギ、エゾヒメクワガタ、キバナシャクナゲ、アカモノ、ヨツバシオガマ、エゾコザクラ、エゾツツジ、ミヤマリンドウ、などです。無事に小屋に１４時３５分到着。携帯トイレを補充すると縦走登山で小屋を利用していた方たちから「携帯トイレ助かります。スーパーで売ってなくて」と感謝されました。小屋周りを清掃し、軽食と水を十分に飲み、14時50分下山開始。夕暮れは熊の活動時間です。私が先頭をひたすら歩き、登山口に１７時５０分でした。帰宅は２１時。ようやく汗を流すことができました。

黒岳頂上

エゾシマリス

イワブクロ

メアカンキンバイ

カラマツソウ

　７月２９日、厳しい暑さの中、黒岳に登りました。大雪山系で高山植物の定点観測を続けているＡさんに同乗させていただく。江別４時半出発。ロープウェーとリフトを乗り継ぎ、７時５０分、７合目登山口を出発。Ａさんは身軽にどんどん進み、石室近くの高山植物帯でようやく合流できました。その間、私は一人歩き。でも多数の登山者も登っているので心配はありません。風もなく滴り落ちる汗との闘いでした。私は高山植物のパトロールもかねています。８号目まではマルバシモツケ、カラマツソウ、チシマキンバイソウ、ウコンウツギなどが咲いている。ニセイカウシュッペがくっきりと見えました。９合目から黒岳頂上にかけてはダイセツトリカブトがいっぱい。ウメバチソウも少し咲いている。頂上９時半着。一気に視界が開けて気持ちが良かったです。外国人も多数登っていて、大雪の雄大さを満喫していたようです。石室近くの高山植物帯にはチングルマ、アオノツガザクラ、エゾツガザクラ、メアカンキンバイ、イワブクロ、ヨツバシオガマ、イワギキョウ、ミヤマリンドウなどがたくさん咲いている。石室ではエゾシマリスが大歓迎！してくれました。少しの間、私たちを観察してから、餌などは要求せず自分の居場所に帰っていきました。
野生らしい潔さに心が洗われました。帰りのロープウエーは超満員。自宅には１７時前に帰宅できました。

初めての天体観測会

８月３日観測会で木星が見えました
撮影：及川文さん

口径31ｃｍの反射望遠鏡（昼間に撮影）

昨年１０月に完成した「銀河天文台」の初の観測会を８月３日に開きました。栗山や札幌市内、近所の方たちに星見を楽しんでいただきました。

大人だけでなく、幼稚園児から、小中学生も含めて１６人です。ドームは大人５人ほど入りますが、口径３１ｃｍの反射望遠鏡にびっくりしたようです。小さな子どもも「ぼく、見えないよ」ときちんと主張して、夫は一人ひとりに対応していました。持病もこの時間だけは緩和されたようです。

木星が美しく、縞模様がくっきり見えて、宇宙が近くに感じました。普通、公開天文台は、自動調整ですが自分の目で焦点を合わせられるのも楽しかったようです。雲が出て、Ｍ13や星雲や星団などは見えず残念でしたが、次回の楽しみとしましょう。夜空に心をはせたひとときでした。（写真右は星座表）

本 Books

線量計と奥の細道

ドリアン助川著　幻戯書房
２３７６円

東日本大震災と福島第一原発事故後、ドリアン助川さんが２０１２年８月から１１月にかけて、芭蕉が歩いた奥の細道を折り畳み自転車で巡り、人との出会いを中心に線量計を片手の紀行文です。全行程は２０００キロに及びました。特に福島と宮城における被害の大きさや現地に生きる人々の苦しみや悲しさを伝えています。

読みながらドキュメンタリー映画「福島は語る」の場面がいくつも思い浮かびました。
線量計がはじめて緊迫する数値を表示したとき「昨日までの旅とは、なにかが根本的に変わってきた」とドリアンさんに迷いが生まれます。その地は、日光裏見の滝　展望施設横で測った数値は０、４３マイクロシーベルトを示したのです。芭蕉が「暫時は瀧に籠るや夏の初め」と詠んだ場所でした。事故を起こした原発から百キロ以上も離れた地でした。福島県の白河では牧師をされている山下勝弘さんご夫婦に会います。家庭を失った子どもも含めた福祉施設の園長もされています。そこで数値は０、５９６マイクロシーベルトを示したのです。年間では５、２２ミリシーベルト。驚くべき数値に、言葉を失いました。とても子どもたちは外遊びができる状況ではないのです。園庭は除染されたといいますが、汚染土はブルーシートをかけられた状態で園庭の隅にあるのです。これが１回目の旅でした。

２回目の旅。石巻では、津波で家を流された似顔絵師の熊谷さんの話に胸が詰まりました。家族を失った人たちが、在りし日の子どもたちの写真をもって並びます。熊谷さんは泣きながら似顔絵を描くのですが、熊谷さん自身が精神的に不安定になります。そんな時に熊谷さんの妻が「それは供養なのよ」とひと言。熊谷さんに覚悟ができたのはそれからだったというエピソード。

焼け焦げた小学校の校舎のグランドで子どもたちが野球をする姿を写真に撮ります。涙が私にも伝染しました。怒りがこみ上げるドリアンさん。「正真正銘の被災地にいる子どもたちを放っておいて、震災から遠く離れた福井県の核施設に財源を回す理由を教えてもらいたい」と書きます。ドリアンさんは、「いったいなんの資格があって、被災地をさまよっているのだろう。なぜ、放射線量計などを持ち出したのだろう」と逡巡する姿もありました。

東京に列車で戻り、またその続きを走るというように、全行程を四回に分けそれぞれ一週間前後走行し、ほぼ三か月かけて大垣までの踏破の記録でした。

２０１８年の発刊。その後　あとがきにかえてにドリアンさんは「芭蕉と曾良の旅から三百余年。象潟が陸地になったように、日本列島は方々で形を変えている。世界一の活断層の巣であり、薄皮一枚下はプレートが複雑にうごめき合っているのがこの列島の正体なのだ。数えきれないほどの大地震の歴史と、実際に起きた原発事故から、私たちは何を学んだのか。危険はすぐ目の前にある」と結びました。

３．１１の１ヶ月後に、事故を知らずに８８歳で亡くなった父は、福島県の矢祭町の出身でした。戦後、単身北海道に渡り、森林官として生涯を終えました。旅が好きで、私も子どもの頃、何度も父と一緒に福島を旅した日を思い出しました。父は二重に故郷を失ったのです。原発事故から８年がたっても、放射性物質で汚染された山や川や海は、除染のしようもなく、空気中の見えない恐怖が未来の不安をかき立てます。オリンピックよりも福島の人々の暮らしと安全を守ってほしい。福島に心を寄せていたいと思いました。

同調圧力

望月衣塑子　前川喜平　マーティン・ファクラー共著
角川新書　970円

政治やメディア、社会もまた同調圧力が強まっています。本書はそうした状況を厳しく追及するジャーナリストと元官僚３人による論稿と、話題になった映画「新聞記者」の劇中の座談会も収録されています。本書は、望月衣塑子さんの「新聞記者」を原案とする映画「新聞記者」の公開に合わせて企画されました。（６Ｐの「新聞記者」映画評もご覧ください）

望月さんは菅義偉官房長官にいくつもの質問をしたことで注目を集めました。官房長官は都合の悪い質問には答えないという暴挙に出たのです。望月さんは他の記者から「あんな質問は意味がない」と言われることもあると明かし、本当にそうだろうかと書きます。質問への不誠実な対応や苦々しい表情、時に漏らしてしまう本音。加えて官僚たちの妨害行為など、権力の中枢にいる人間の素顔や本性が見えてくるのではないかと。だれのために報道するのか。何をするために記者をしているのか。原点に立ち返れば同調圧力が頭をかすめることはない。と明快に語っています。

前川喜平さんは前文部次官。「組織と教育現場の同調圧力」について語っています。自分自身の座標軸を自分の中に確立できなければ、どのような生き方をすることになるか。長いものに巻かれることを善と受け止め、強い権力に同化させることで自らのアイデンティを持とうとする。無意識のうちに同調圧力に屈し、忖度や萎縮を絶えず繰り返す。そうした人間が増えているのが今の日本だ。自ら考える力を育てる教育が今こそ必要だと声を大にして、訴えたい。と述べています。「自由」とは心を縛られないことだ。真に自由な人間に、同調圧力は無力だと語っていて、心に響きました。

アメリカや日本だけでなく、中国やロシアでの取材経験がある元ニューヨークタイムズ東京支局長マーティーン・ファクラーさんは、長く日本のメディアを見てきて、強く感じるのは、調査報道の対極に位置するアクセス・ジャーナリズム、つまり権力者からいかに情報を得るかにあまりにも重きが置かれている点をあげています。取材対象者との円滑なコミュニケーションをとることばかりに気を取られていて、問題意識さえ抱いていないように思えると書いています。自分が何をしたいのか。何をすることが正しいのか。強い覚悟と自尊心を貫けば、望まない圧力に呑み込まれることもない。と書いています。

メディアだけでなく、自立した個人が力を合わせて同調圧力を打ち破っていかなくてはと思います。言うべきことを言う。書くべきことを書く。私もこの本から勇気をもらいました。

報道事変
なぜこの国では自由に質問できなくなったのか

南　彰著　朝日新書　853円

いま政治取材の現場で何が起きているのか。「質問できない国」の内側を暴きます。不都合な質問を封じ日に日に軽視される記者の質問。巨大化する権力の揺さぶりに、記者はどう立ち向かうべきか。そして、何がこうした政権の横暴を可能にしているのか。政治部記者として歴代官房長官会見を５００回以上取材した南彰さんが、嘘や強弁がまかり通る政治の現状に警鐘を鳴らす。南さんは現在新聞労連執行委員長です。

自分たちの周りで起きていることを率直に語らないから、国民・市民の共感も得られない。そうした悪循環を断ち切り、メディアで働く仲間をもっと国民・市民に「必要だ」と感じてもらえる存在へと変えていきたいと南さんはこの本を書いた動機を語っています。

帯文に「疑惑を追及する新聞に対する権力側の攻撃の特徴は、メディアの信頼の低下に乗じ、「誤報」「捏造」というレッテル貼りをネット上で拡散することだ。嘘や強弁がまかり通るなかでの「トンデモ発言」「デタラメ答弁」をここで明らかにしよう」とあります。その考察の中心に据えたのは、菅義偉官房長官の記者会見において、東京新聞社会部の望月衣塑子記者が２年近くにわたって受けている質問制限・妨害問題でした。安倍晋三首相の友人が理事長を務める加計学園の獣医学部新設をめぐり、文部科学省内に「総理のご意向」と書かれた文書があることを朝日新聞が報じた際、菅官房長官は「怪文書のようなものだ」と存在を否定しました。メディアの信用力の低下に乗じ、「誤報」扱いにすれば逃げ切れると考えたのでしょう。その後、約１ヶ月にわたり、政府をあげて国会や記者会見で偽りの答弁を続けたのです。官邸の情報統制の怖さが伝わってきます。

報道の自由を守り、権力の監視としての役割を果たせるように、私たち市民もメディアを応援しなければならないのだと強く思いました。新聞もテレビも真実を報道しなくなったら、ある日「戦争が始まっていた」という事態になりはしないか。戦前の「満州事変」のように。後から振り返ったときに、取り返しのつかない「事変」とならないようにとの思いが詰まった本です。

南さんは、これからのメディアの幹部には社内に閉じこもった調整能力だけでなく、社会との対話能力が資質として求められると提言。将来世代が思存分挑戦できメディア環境をつくるために、全力を尽くしたいと述べています。大いに期待しています。

同調圧力に屈しない
「私たち、このままでいいんですか」
『新聞記者』

樋口 みな子

札幌映画サークルシネアスト８月号掲載

参議院選挙、真っただ中です。朝日新聞の調査で２０～３０代の男性の５０パーセント以上が安倍政権を支持していると報じました。これだけ非正規の若者が増え、格差も広がっているのにと驚かずにはいられませんでした。「格差があるのは仕方がない。自己責任だ」「頼りになるのは政治ではなく、スキルとお金。自分のことは自分で守るのが当たり前」と言い切っています。格差の拡大や貧困を、政治の問題と考えない若者が増えていて、新聞を読まず、ネットで拡散されるフェイクニュースに翻弄されているのが、今の社会の世相に見えます。

この映画は日本の政治やメディアの危機を果敢に告発。日本映画でここまで現政権を徹底的に批判したものがあったでしょうか。公開3日間で5万人が観たとありました。『新聞記者』は東京新聞の望月衣塑子さんの原作から触発されたというフィクションです。公開から数日後の平日に観ましたが、8割の席が埋まっていました。若者の姿もみかけました。動機が人気俳優への関心であったとしても、政治に関心がなかった人が、強大な官邸権力の情報操作の怖さを知る機会になればと思いました。私もささやかなミニコミ紙を発行しています。こういう映画は是非紹介したい。娯楽映画も大好きなのに、「権力批判映画が好きですね」と映画サークルのみなさんにはすっかり見抜かれています。

望月さんの「新聞記者」を読んで映画製作を決意した河村光庸ディレクターは1986年生まれの藤井直人さんを「若い人と同じ目線で撮ってほしい」と監督として起用。藤井さんは「自分たちの話なのに今まで無視していたことに気づき勉強しました」と語っています。

この映画は藤井監督の代表作になるような予感がします。

大学新設の極秘情報を追う記者・吉岡エリカをシム・ウンギョン、理想とは裏腹に現政権に不都合なニュースをコントロールするという職務を担う官僚・杉原拓海を松坂桃李が演じています。架空の設定ながら、現政権下で起きた事件や疑惑。これでもかと起きる現実とオーバラーップさせながらドラマテッィクに展開します。

現実にリンクしたリアルなイメージを出すために、望月記者、前川喜平さん、朝日新聞の南彰記者（新聞労連委員長）、元ニューヨーク・タイムズ東京支局長のマーティン・ファクラーさんの４人が安倍政権の実態や報道のあり方について議論している映像を劇中で流していて、どんな展開になるのだろうと緊張感が高まります。メディアや内閣情報調査室についてのそれぞれの意見が、政界の闇に踏み込む物語を強力に支えていました。

二人は、国のあり方が問われる事態に気がつき、どう生きるべきかと悩み、良心に従って行動します。

吉岡が杉原に「私たちは、このままでいいんですか」と問うせりふは真っすぐ客席に向けられていました。杉原が権力の内側でもがきながら決断した、意表を突く行動が圧巻！

「何故、トップがこのまま政権にとどまっていていいのか？」という疑問を投げかけられました。

吉岡は加計学園がモデルのような新設大学にまつわる内部告発を受け取材を始めますがあらゆる手段で政権を守ろうとする内閣情報調査室から激しい妨害にあうのです。かつて公文書偽造を強いられた、杉原の先輩官僚の自殺や、加計学園による獣医学部新設の件では「私が在職中に専門教育課で作成されて受け取り、共有していた文書であり、確実に存在していたものだ」と指摘した前川文部次官（当時）の醜聞をでっち上げた新聞社、伊藤詩織さん暴行揉み消しなど、実際の事件を想起させるシーンがいくつもありました。忖度や萎縮といった及び腰な姿勢は一切なく、官邸の闇に堂々とスポットを当て、新聞記者とエリート官僚が、巨大な政府に挑んでいく姿を鋭い筆致で描き切っています。しかし、こんな大きな問題は取材チームを立ち上げ、複数の記者で裏取りするのではないでしょうか。『ペンタゴン・ペーパーズ』のような厚みを持てなかったのが残念です。

杉原の上司は冷酷に「この国の民主主義は形だけでいいんだ」と言い放ちます。国家のためにはどんな手も使う内閣情報調査室のトップの不気味さは、今の独裁政治とつながっていました。国民に知らせたくない情報は隠蔽されるのだと、あまりのリアルさに震撼しました。公文書の隠蔽、改ざん。嘘。何のために国会があるのかと思うことばかりがまかり通っています。メディアが言うべきことを言わなければ、国民は知る権利を奪われてしまいます。同調圧力に屈してはならないと思います。さもなければ国民は権力によって意のままに分断されてしまいます。

Cinema Graffiti　〈私の映画評〉　シネマグラフィティ

新設の大学が「生物兵器」を研究するというのもまるで未来を予言しているかのようで、怖かったです。公的文書は未来に残す大事な資料です。官邸が事実を隠蔽しては、歴史から学ぶことが出来なくなります。戦後に多くの文書が焼却され、戦争の歴史を伝える資料が無くなりましが、同じようなことが今でも繰り返されているのです。

事実をつきとめ、記事にし、輪転機が回り紙面が刷り上がっていくシーンが　『ペンタゴン・ペーパーズ／最高機密文書』を彷彿とさせます。萎縮せずに権力に立ち向かって真実を書く記者魂に勇気づけられました。でも爽快感には至りません。まだまだメディア全体が言うべきことを言い、社会を変えていく力になっていないから。でも『ペンタゴン・ペーパーズ』や『スポットライト 世紀のスクープ』『記者たち 衝撃と畏怖の真実』などの系譜につながるタブーに挑戦したことは、特筆に値するのではないでしょうか。そこに希望をみました。

(C) 2019『新聞記者』フィルムパートナーズ

主戦場

監督・脚本・撮影・編集・ナレーション：ミキ・デザキ

歴史研究家や政治家、ジャーナリストなど、従軍慰安婦被害を認める側(支援派)と否定する側、３０人近くがインタビューに答えています。否定派は一貫して、慰安婦ではないと主張します。自民党の杉田水脈・衆院議員、「新しい歴史教科書をつくる会」の藤岡信勝副会長、ジャーナリストの桜井よしこ氏、弁護士のケント・ギルバート氏らです。たくさんのお金を貰って、強制ではなく売春だと主張。強制連行されて、人間としての尊厳を奪われたと、声を振り絞って訴えているのに、そんなことはない嘘だと言う人たち。対する支援派は、歴史学者の吉見義明氏、林博史氏「女たちの戦争と平和資料館」の渡辺美奈事務局長らが、公文書を含む資料やこれまでの調査・研究を基に反論を加える形で進みます。感情的にならず冷静に主張して、事実がどちら側にあるかは歴然でした。

このドキュメンタリーは、デザキさんが日本の大学院で研究テーマとして取り組みましたが内容が評価されて各地で上映が始まりました。

否定派が上映中止を求める声明を出したためネット上でデザキさんへのバッシングが起きています。慰安婦問題で事実を報道していたにも関わらず、捏造記者とされた植村隆さんと同じことが起きたのです。植村裁判を支える会で、デザキさんのお話も聞きました。デザキさんはアメリカ社会であからさまな人種差別を受けたと語りました。植村さんに関心を持ったのは自身の体験もあったのかもしれません。

上映中止を求めている藤木俊一氏。「フェミニズムを始めたのは不細工な人たち。誰にも相手にされないような女性」と語るシーンがスクリーンに映し出されます。自称歴史家の加瀬英明氏は「人の書いた歴史書はまったく読まない」と発言。彼らの表情から人間性があらわになります。「目は口ほどに物を言う」とはこのことかと思いました。

デザキ監督は、否定派の話を聴いているうちに何が本当なのか分からなくなったともインタビューに答えていますが、数字の信ぴょう性や「強制連行」について疑問を抱きながら、真実に迫りました。そして「２０万人」という数字が、旧日本軍兵士の数などを基にした推計の一つに過ぎないこと、日本で慰安婦問題を追及する側もこの数字に依拠することには慎重な姿勢を示しているという事実を紹介しています。

インタビューもよくぞ、これだけたくさんの人に会い、話を聞いたこと。たくさんのニュース映像と記事の検証、分析と素晴らしい構成と、畳み掛けるような太鼓を使った音楽もよかったです。たくさんの情報をテンポよく伝え、この映画が初めてとは思えないほど完成度が高いです。日本でここまで追求した映画はありませんでした。今後の活躍に期待が高まります。

「主戦場」というタイトルには、「映画を見る人にも、当事者として議論の渦中へ入ってほしい」という監督の思いが込められています。

私が一番感心したのはカリフォルニア州のグレンデール市に慰安婦像が設立されていることでした。反対派もいて、撤去を巡って裁判も起こりましたが、グレンデールの元市長が「慰安婦問題は若いアジアの少女たちに起こった人権侵害だ」と語った見識に感動しました。その像を見た女性が「世界中に慰安婦像があったら、それぞれの人が考える機会になる」と答えていたのも印象的でした。

情報量が多く、機会があったらもう一度観たいです。

僕たちは希望という名の列車に乗った

ラース・クラウメ監督

１９５６年、まだ「ベルリンの壁」が建設されていない頃、東西ベルリンの往来がまだ可能だったころの物語です。

監督は「アイヒマンを追え！ナチスがもっとも畏れた男」のラース・クラウメです。時代はドイツ敗戦の傷が、まだ深く刻まれているのです。

東ベルリンのエリート高校に通う、テオとクルトは、西ベルリンの祖父のお墓参りに行き、映画館でハンガリーの民衆蜂起を伝えるニュース映像を見て衝撃を受けます。自由を求めるハンガリー市民に共感した2人は純粋な哀悼の心から、クラスメイトに2分間の黙とうを呼びかけ実行するのです。たったこれだけのことが、大変な事態になるとは誰も予想していませんでした。

東ドイツでは社会主義国家への反逆とみなされて、学校だけにとどまらず、教育大臣まで、首謀者は誰かと追及が始まります。この時代、お互いを監視し、裏切り、密告が奨励されたそうです。高校生たちがどう考え行動したかが描かれます。誰が首謀者かを証言しない限り、全員が放校される厳しい取り調べがとても尋常ではなく、観ていて心臓の動悸が止まりませんでした。

テオとクルトのクラスメートの一人、エリックは東ドイツの模範的な青年の象徴として登場します。そのため、首謀者を密告するように当局から迫られるのでした。さらに、エリックは尊敬していた父がナチの協力者で、戦後ソ連によって処刑された事実まで知ってしまいます。エリックは体制も家族も信じられなくなり、絶望の果てに体制側に銃を向けます。この場面が悲しい。エリックはクルトに自分の非を謝ります。テオは労働者の息子で、家族の期待を一身に背負っています。クルトの父は体制側のエリートです。葛藤の中で、もがき、苦しみながらも、自分の頭で考え、現実に真っ向から向き合おうとするクラスメートたちが素晴らしい。希望という未来をつかんでいく１８歳の勇気に胸がいっぱいになりました。エリックの悲劇が、この映画に深みを持たせていました。その後の彼らの人生が知りたいと思いました。

ビル・エヴァンス タイム・リメンバード

ブルース・スピーゲル監督

ジャズピアノの詩人ビル・エヴァンスの生涯を追った生誕９０周年記念ドキュメンタリー。世界各国の映画祭で最優秀ドキュメンタリー映画賞に輝いた本作は、エヴァンスの「時間をかけた自殺」とも言われた５１年の人生と音楽をとらえたもの。出自からキャリアのスタート、エヴァンスを巡る人間模様、そして死の間際までを、貴重な証言、映像、写真の記録によって構成しています。

愛する姪デビイ・エヴァンスのために作曲した「ワルツ・フォー・デビイ」の美しいメロディが、なんど聴いても魂を揺さぶられます。ビル・エヴェンストリオ、最初のベーシスト、スコット・ラファロに代わって加入したチャック・イスラエルズは「エヴァンスの人柄はまったくわからなかった。知るべきすべては音楽の中にある」と語っていたのが印象的。ドラマーのポール・モチアンは「本当にすごい。一緒に演りたいと思った」と語り、ボーカリストのトニー・ベネットは「まるでオーケストラと録音しているようだった」と証言しています。

軽妙なテンポで、華麗なキャリアを積み上げていくさまが、たくさんの音楽で再現され感動しました。スコット・ラファロのあまりに早すぎる交通事故死がエヴァンスに深い悲しみをもたらします。喪失感を埋めるかのように、過剰なヘロイン摂取によって、体が蝕まれていくのです。恋人や敬愛する兄まで自死で失います。完璧な演奏と称賛されながら心の空洞を埋めることができなかったのでしょう。素晴らしいピアノ演奏がいつまでも胸に響いています。

日韓関係が泥沼のような対立に陥っている事態を憂慮し感情的ではなく合理的な対話で問題の解決を求める声明が発せられました。声明は賛同署名をも求めています。声明　韓国は「敵」なのか　https://peace3appeal.jimdo.com/　からご覧ください。賛同人も募集しています。第一次の締め切りは８月１５日。　https://ssl.form-mailer.jp/fms/a466957e630362

郵送料が値上げしました

２０１２年にゆうメール特約で印刷通信をお送りするようになりましたが、当時から３０円も値上げして定形外で１通１１０円かかります。印刷費はネット印刷ですが２６０００円、郵送費が２００００円で合わせて４６０００円が毎号かかります。郵送を希望する方は振込にご協力ください。今まで、講演会などでお世話になった方に、無料でお送りしていましたが今後はwebで読んでいただけますようお願いします。

購読料と寄付をありがとうございます（敬称略）
６月１７日～７月３１日

吉田雅子　高橋　儁　土門寛治　堀　泰雄
富森保枝　新妻　徹　高縁恵美子　佐々木睦子
斉木登茂子　竹田とし子　中小路朋子　森脇栄一
合計３９５００円は印刷と送料に使わせていただきます。
堀　和恵さんからは著書を寄贈いただきました。合わせてありがとうございます。
郵便振替をご利用ください。年間１５００円
「銀河通信」02740-7-56535